
ペー太郎

miffu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペー太郎

【Nコード】

N2763U

【作者名】

m i f f u

【あらすじ】

記憶を無くしたある少女の話。自分が誰なのか、そして記憶無くしたのはどうしてだろうか。記憶を思い出しつつ、周りの人に助けられ、真実を知っていく恋愛ストーリーです。

1話 前途多難（前書き）

これは、フィクションです。

推理小説ではないので、ご注意ください。

途中、B Lが混じる場合もございますので、苦手な方は読まない事をお勧めします。

1話 前途多難

1 前途多難

.....

(ここ、どこだろう...)

(その前に、私は誰だろう.....)

目が覚めたときに思った事。起きる前の事はさっぱりわからない。一体どうなっているんだろう？

廊下からドタドタと騒がしい足音が響いた。

「ペー太郎!!」

女の人と男の人がドアを激しく開けた。

「ペー太郎!無事なのね。」

「ペー太郎:よかったあ。」

(.....ちよつと待て!!私がペー太郎!この人たち、私の事ペー太郎って呼んでる。何で?うつつ何も思えない.....)

「ペー太郎:お母さんよ!わかる?」

「ペー太郎、父の顔忘れるわけないよなあ?!」

どっかの少女マンガにできそうなウルウルした目つきで私を見ている。

「だ...誰だかわかりません。」

そう答えると、洪水のように泣き出した。その後ろに立っていた医者まで何故か泣いている。もらい泣きにしては、泣きすぎるほどに.....父と母らしき人物は、私の為にいっぱい泣きだした。どうしようと考えていると、廊下が再び騒がしくなった。

「ペー太郎!!」

同じ登場の仕方、青年が入ってきた。周りから見れば、かなりの美男子だろう。その美男子は入って来た直後、私に抱きついてきた。

「ペー太郎、お兄ちゃんが向かいに来たぞ。お兄ちゃんの事がわかるよな？」

頬をすりすりしながら、ぎゅっと抱きしめる。恥ずかしくて、少し固まってしまったが、冷静に答えた。

「あの、どちら様でしょ。」

その言葉を聞くと、美男子は子供のように泣き始めた。

（こんな綺麗な人が、お兄ちゃん。一体、どうなっているんだ。）
混乱はしているけど、本来ならこういう場合、当の本人である私が泣くはずなのに、他人である大の大人が4人も泣いているので、泣くにも泣けない状態になってしまった。

一体、何がどうなってしまったんだろう……

（いや、その前に何で私の名前ペー太郎なんだろう。仮にも、女の子なのに……）

やっと気持ちの整理がついたのか父と母らしき人物は、医者と話すとの事で、別室に向かった。

その間、私の兄らしき人物と二人きりになった。私は、一番聞きたいというか、突っ込みたいところ聞いた。

「あの。私の名前ってペー太郎って言うんですか。」

おそろおそろ聞くと、兄はにつこり笑って、

「そうだよ。お前の名前は、古吟こぎんペー太郎。俺の妹だよ。」

満面な笑みで返された。通常の人であれば、胸キュンで倒れているだろうけど、めげずに、聞いてみた。

「でもどうして、ペー太郎という名前に……。あの、ちょっと気になつて。」

「それは、俺が考えたからだよ。ペー太郎は、ペー太郎だ。」

真剣な眼差しだった。

私の動揺も気にせず、兄は、椅子から立ち上がり、拳をぎゅっと握りしめて、目をキラキラした。

「ペー太郎は世界中で一番可愛い妹で、勉強が少し苦手で、部活はテニス部に入ってる。特にスコートはいた姿がとてもかわいくて、あつ後、ペー太郎は、たまに母さんとお菓子を作るんだけど、いつも失敗して泣いていたな。もちろんそのお菓子はお兄ちゃんが全部食べたんだぞ。親父の奴よく怒っていたな。“ペー太郎の作ったお菓子全部食うな”ってな。それと…」

「待った！！もう十分です。ありがとうございます。」

物足りなさそうな顔しているが、何故か、すごく恥ずかしくなったので、話を止めた。

（兄や父、母には、愛されてる事がわかった気がするけど、何かはぐらかされた様な気もする。）

少し安心した様な、安心してはいけない様な、複雑な気持ちになった。

「改めて、俺は、古吟雄治（こぎんゆうじ）。雄治でも、お兄ちゃんでも、好きに呼んでいいから。」

手を差し伸べられ、私は、その手を握り返した。

その後、医者との話が終わったらしく、父と母が戻ってきた。

「生活には支障ないみたいだから、家に帰れる事になったわよ。」

「大丈夫さあ。私達家族が、ペー太郎を助けるからなあつはつはつは！！！」

背中を叩く父に、それを見て笑う母と兄。前途多難の序章の予感がした。

2話 家の中

2 家の中

あの後すぐに退院し、私は家に向かった。
着いてみると、レンガの一軒家に着いた。かなり頑丈な作りをした建物だ。

「ペー太郎！！ここが我が家だ。」

家の前で叫んでるのが、私の父、古吟雄治こぎんゆうじ。大手オモチャ会社の社長さん。かなりのやり手で、“いぶし吟”と言われているらしい。恥ずかしいのは私だけだろうか。私の顔は真っ赤になった。それに気付いたのか、後ろから母が背を押して、

「さあ、入った、入った。」

流されるままに、家に入った。背を押したのが私の母、古吟聡美こぎんさとしみ。料理が得意。それを活かして、料理教室を開いている。近所で美味しいと有名ならしい。後、可愛い物好きとの事。

父と母と兄と私の4人家族。家に着くまで、兄に教えてもらった。

家に入って、違和感を感じた。まず目に入った物は、ペンギンの絵であった。その他にも、ペンギンのスリッパ、ペンギンのマット、時計、置物、ペンギングッズがいっぱいあった。可愛い物好きの母の好みだろうと、納得した。

二階に上がり、私の部屋に案内された。ドアにしつかりと【ペー太郎】と書いてある。名札の周りには、派手にペンギンが描かれていた。後ろにいる母にぐるんと向きかえり、手をプルプルとさせ、名札を指した。

「この名札、私が飾ったの？」

「あら、それはお父さんがどうしても飾るんだって言うものだから、新しく作ったのよ。」

私の中で、父は恥ずかしい人だと認識した。

そして少しドアを開けると、部屋の中には、たくさんのペンギンのぬいぐるみがいた。沈黙が続き、母に尋ねた。

「私の部屋って、何故こんなにペンギンのぬいぐるみがあるんですか？ペンギンが好きだったとか。」

と聞くと、母はくすりと笑い、

「それは、ペー太郎の友達が“お誕生日に”って、いつもペンギンのぬいぐるみを贈っていたみたいよ。うちでも、行事みたいになっているけどね。」

その後、鼻歌を歌いながら母は階段を下りて行った。

という事は、家中にあったペンギングッズは母のコーディネートでなく、私の趣味と友達のプレゼントによって、集められたということらしい。未だに、自分がペンギン好きというキーワードを聞いても、シツクリこない。

私は、自分が使っていたらしい部屋に一步一步、中に入っていた。とりあえず、前に使っていた物で思い出す物はないか探してみた。ガサゴソと探してみたが、ペンギングッズをたくさん見つけただけだった。

「そう簡単にわかる訳ないかあ」

スカートのポケットに手をつ込んだ。入れた時、“カサツ”と紙の様な音がした。

(きつと、何かの手がかりになるかも)

ポケットから紙を出し、カサカサと音をたてて開けると、小さな紙が一枚入っていた。その紙を開くとまた紙が出てきた。イライラさせながら、その紙を開くと、鉛筆で小さな文字が書いてあった。

「クリームチーズ250g、生クリーム200ml、卵2個……………」
意味不明な文章であった。

「これは、何かの材料かなあ??」

材料だけで、料理方法が書いてない。何で、ポケットの中に入っていたのかもわからない。謎が深まった。考えていると、兄が部屋に入って来た。

「ペー太郎！今日は、お前の好きな肉じゃがだぞ。兄ちゃんと一緒に食べような。」

鼻歌を唄いながら、私の手を握り1階に下りて行った。

材料の書かれた小さな紙とペンギンって、その前にこの手！！恥ずかしくて、顔が真っ赤になって何も考えられなくなった。

この生活に慣れることが、第一の関門かもしれないと悟った。

3話 いざ、学校へ

3 いざ、学校へ

夕飯を食べた後自分の部屋に戻り、ベットに倒れこむように寝ころんだ。ベットの横にあった大きなペンギンのぬいぐるみを抱きかかえ、ぬいぐるみを上に上げた。ペンギンを見ながら、今日、一日を振り返って見た。

起きたら記憶がなく、父と母と兄、3人が病院まで向かいに来てた。そして私の名前は、ペー太郎という変わった名前。それも、その名は兄が付けたらしく、その話題をあやふやにされた感じがした。謎といえば、この部屋と家の中にあるペンギングッズとポケットにあつた小さな紙。ペンギンは、私がただペンギン好きってことなのか、それとも、他に理由があるのか。小さい紙も材料が書いてあるだけで、何の事だかさっぱり。謎が深まる一方で、何にも解決策が思いつかない。

(これから私、どうなっていくんだろう…)
もやもやと考えてるうちに、寝てしまった。

次の日、私は兄の車に乗り、自分の通っていた高校に登校した。「家にいるのはあまり体によくないから、学校に行つて来なさい。」と父は悲しげな顔して言った。後で知った事だが、家で療養すれば一緒にトランプしたり、DVD見たり、元気になったら遊園地に遊びに行こうという計画が母にばれ、説得されたい。母の行為に感謝した。

兄に連れられ、職員室に向かった。あらかじめ、私の事は話してあるらしい。職員室に入ると、椅子から立ち上がり、眼鏡をかけた男性がこちらに来た。

「ペー太郎さんこんにちは。私はあなたのクラスの担任、八鹿^{やじか}です。

よろしく願います。」

ペンだこの手を差し伸べて来た。

「よっよろしく願います。」

握手してみると、その手は意外にも冷たかった。

「じゃあ教室案内するから、着いて来てね。」

職員室で兄と別れ、八鹿先生と一緒に教室に向かった。教室入ったらなんて挨拶しようかと頭の中で、グルグルと考えているうちに教室に着いてしまっていた。軽く深呼吸して、教室に入った。教室の中は思ったより静かで、全員席に着いていた。その静かな空間の中で八鹿先生は、クラスの生徒に言った。

「皆も聞いている通りだ。後はよろしく。」

と、一言言つて、教室から出て行った。

(……………ちよつと待つて。こんな真正面で置き去りにされて、わつ私はどうすればいいんだ。)

心の中の言葉が、口に出してしまいそうならい衝撃的だった。

一人がボソボソつと何かを言うと、他の人もボソボソと話始めた。私はから見れば、いい雰囲気ではない。どうすればいいのか全くわからない。

”パン”と手を叩く音が、教室に鳴り響いた。

「さあ、始めようか。」

突然一番後ろにいた男子が、絶妙なタイミングで発した。びっくりして一歩下がると、前の席に座っていた少女が私の腕を掴み、後ろの席まで引つ張つていった。

「ここに座つて。」

さつき、発した少年の隣の席だった。少年は、右手に丸めたノートを持って、

「さてさて、これからペー太郎に自己紹介タイムを行いたいと思いますー！」

と彼の声の直後にクラッカーが鳴り、小さな垂れ幕が引つ張られた。そこには“ペー太郎お帰り！”と書いてあった。すると、丸め

たノートを持った少年が”ポンポン”と自分の右肩を叩いた。

「俺、清水進一。おまえとは、小学校からのつきあいだ。よろしく。」

と手を差し伸べてきた。ぎこちない握手をした後、その隣に先程、私の手を引いてくれた少女がいた。

「私はペーちゃんの友達、桜井桃。これからもよろしくね。」

優しく微笑んだ。キョトンとしてると、進一と桃の後ろにもう一人いた。進一がその彼の肩を組み、前屈みになった。

「こいつは俺の友達、池田智雅。口数少ない奴だけど、良い奴だぜ。」

「よろしく。」

智雅は、軽くお辞儀した。

智雅に続いて次々と、クラスメイトと挨拶を交わし、握手した。

クラス全員に挨拶し終わると、八鹿先生が教室を覗き込んだ。

「自己紹介は、終わったかな？」

クラス全員が一斉に、”OKです”と答えた。それを聞き八鹿先生は教室に入り、教卓に立った。

「自己紹介が終わったみたいだし、そろそろ授業始めますよ。」
クラスの出席を取り、授業を始めた。

休み時間になり、進一と桃と智雅がペー太郎の席に来た。

「よ。授業大丈夫だったか？」

「えっと、清水君だよ。なんとか、大丈夫だよ。」

「おい、水くせーよ。進一でいいよ。なあ！」
桃と智雅の方を向いた。

「そっだよ。気にせず下の名前で呼んで。その方が、私たちも嬉しいから。」

桃が微笑んで言うと、隣で、智雅も頷いていた。

「じゃあ、下の名前で、呼ぶね。」
にっこり笑った。

「で、先生にも頼まれたんだが、ペー太郎を校内案内しろとのことだ。」

「簡単にだけど、いいかな？」

「僕も…案内したい所いっぱい、ある。」

3人は必死に、訴えかけた。

「えつと、お願いします。」

深々とお辞儀した。3人はガッツポーズし、ペー太郎を連れて廊下に走りだした。進一は先頭に、桃がペー太郎の腕を掴み、智雅はペー太郎の横にいた。

「さっそく行こうぜ。まず、どこから行く？」

「保健室からがいいと思っただけど！」

「確かに。いいアイデア。」

3人は息ひつたりの会話を、保健室着くまで話し続けた。

保健室着いてみると、保健の先生はいなかった。中に入ると、保健室の独特な匂いがした。

桃はペー太郎の方を向き、説明し始めた。

「ここは保健室。ここの保健の先生って、けっこう出張が多くていない時が多いの。だから、大抵の怪我は、皆、誰か付き添って手当てしてるの。因みに、ペーちゃんはここの常連さんで、いつも私が手当てしてたのよ。この前も転んで、膝を擦りむいてたしね。」

桃は、思い出し笑いをした。ふと膝を見てみると、まだ完治していない擦り傷が確かにあった。これも、桃が手当てしてくれたのだから。

「桃。覚えてないのにこんな事言うのも何なんだけど、手当てしてくれて、ありがとう。」

驚いたような顔をして、桃は微笑んだ。

「どういたしまして。ペーちゃん、怪我したら私に言ってね。」

と言った後会話を切るように、進一がペー太郎の腕を掴んで、また、走り出した。

「じゃあ、次行くよ。今度は、体育館に行くよ。」

100mを全速力で走るような早さで走った。桃と智雅は、進一に不意を突かれ、後方の方にいた。

体育館に着いた時は、足が棒になったようだった。

「ここが体育館。体育の授業とかで、使う事が多いだろうぜ。ほら、体育館からグラウンドとテニスコート見えるだろう。お前テニス部何だから、覚えとけよ。あのグラウンドで、俺と智雅はサッカーの練習してるんだ。俺って、サッカーかなり上手いぜ。この前なんか智雅の絶妙なパスを取り、華麗にシュートしてゴールしたんだぞ。」
「それ、間違い。俺のパスに驚いて、ずっこけた時に足に当たったボールが、たまたまゴールしただけだ。」

進一の後ろからひよっこり、智雅が出てきた。桃も一緒だ。

「智雅、桃。あれっ、俺、そんなに格好悪いシュートしたっけ？」

「進一、頭打って延びてたから、忘れたんじゃない。」

痛い所を、智雅に突っ込まれた。進一は、少し落ち込んだ。

「それより、進一ずるいよ。ペーちゃん独り占めにするなんて。」

「わり、わりー。つい、本気が出てしまった。」

「じゃあ、次。僕が案内する。」

智雅は、スタスタとペー太郎の前に歩きだした。

着いたのは、大きな広場だった。

「ペー、ここは学食。あそこの食券を買って、カウンターのおばちゃんに渡すんだよ。特に、日替わりランチが一番安くてお勧めだよ。パン買う場合は、奥に購買所があるから、早めに行った方がいいよ。僕のお勧めは、ヤミ！つき焼きそばパン。」

「お勧めするなら、デラックス唐揚げパンだろ。大きくて、安いじゃないかよ。」

「そうかな。私なら、生クリームとクリームとチョコがサンドされてる、ミラクルサンドだよ。」

3人は、お互いのお勧めの長所を言い合った。思ったよりも、変わった名前が多い事がわかった。

そうこうしてるうちに、予鈴のチャイムになった。

「やばい。予鈴だ。」

「ダツシュで戻らないと、間に合わないよ。」

「ぎりぎりだ。」

「早く戻って、授業受けなきゃだね。」

4人は廊下を全速力で、走った。

放課後、進一達に遊びに行こうと誘われたが、兄が迎えに来てたので断った。家に着き、部屋で考え事していた。夜空を眺めていると、ドアを叩く音がした。

「誰。」

「お兄ちゃん何だけど、部屋に入っていないか。」

「どうぞ。」

雄治は部屋に入り、ペー太郎の横に来た。お互いに夜空見上げ、沈黙が続いた。最初に沈黙を破ったのは、雄治だった。

「綺麗だな。」

「うん。…綺麗だね。」

「学校どうだった、楽しかったか。」

「楽しかったよ。けど…。」

「けど、どうした。」

「何にも覚えてないのに、多分皆、今までどうりに接してくれるのが、凄く遣り切れない気持ちでいっぱい。何で、忘れちゃったんだろうなって何度も思ってしまった…。」

また、沈黙が少し続く。

「それは、ペー太郎が皆の事を大好きだったからさ。ペー太郎も、その気持ちを忘れなければ、今度こそ忘れたりしないよ。記憶も、一時的なものだと医者は言っていたから、大丈夫だよ。」

雄治の言葉に少し安心したような気がした。何だか、前向きに頑張ろうと思うようになった。

また2人で夜空を見ていると、下からドタドタと上がってくる音がした。バンつとドアを開け、部屋に入って来たのは父だった。

「ペー太郎、寂しかっただろう！父さんと下で遊ぼう。」
父にあごひげをジョリジョリされ、固まってしまった。その後夜中
まで、父とトランプする破目になるとは、このときのペー太郎は、
知る由もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763u/>

ペー太郎

2011年6月26日23時40分発行